

論考

日本における『三国志演義』の再話 ―日中戦争期の『三国志』ブームを中心に―

箱崎 緑

一、はじめに

第二次世界大戦後の日本において、『三国志演義』再話の決定版と言える作品は、第一に、吉川英治『三國志』であろう。例えば、柴田鍊三郎は、一九五五年に吉川版を再話した際、『三国志演義』ではなく吉川版を読者に薦めており、このことから既に一九五〇年代には、吉川版が『三国志演義』再話の決定版になっていたことが窺える。

このように、吉川版は、湖南文山『通俗三國志』と並んで、日本における『三国志演義』の受容において重要な作品であるが、戦前における唯一の再話ではなく、日中戦争という時代の中で、他の再話作品と相前後しながら生まれた作品であった。吉川版連載前後、一九三九年から一九四一年の僅か三年程の間に、残されているだけで六種類もの『三国志演義』の再話が新しく出版されていたのである。従来、『三国志演義』の受容においては、吉川版の重要性のみが論じられてきたが、吉川版も含む、この「三國志」ブームとも言える日中戦争期の三年間は、日本における『三国志演義』受容にとって重要な画期である。江戸時代に成立した『通俗三國志』の完成度の高さ故に停滞していた『三国志演義』の大人向け再話が、日中戦争期の中国に対する関心の高まりを契機に多数登場し、戦後受容の基礎を成したのである。

本論文では、明治期から日中戦争期へ到る出版状況を概観し、「三國志」ブームとも言える様相を呈した日中戦争期の『三国志演義』の再話について検討することで、日本での「三國志」の受容における日中戦争期の重要性を示したい。

日中戦争期までの『三国志演義』再話の書誌を整理した先行研究の中、石崎氏は書名を挙げるに止まり、雑喉氏、中林氏は、一部を取り上げて論じている。上田氏は、明治期から昭和初期の『三国志演義』の受容について研究の構想を示しているが、二〇一二年三月現在、江戸時代を扱う前篇に止まっている。

以下、一九四五年までに出版された『三国志演義』関連小説を網羅することを目指し、整理したものを示す。ここでは、現在確認できる『三国志演義』の注釈書、評釈書と再話作品を扱い、『通俗三國志』『通俗絵本三國志』、また、講談速記や芝居の脚本、日本風の翻案、詩、評伝、研究書などは除いた。

二、『通俗三國志』からの分化

本項では、江戸時代に広く読まれていた『通俗三國志』が、明治以降のように展開していくかを見ていく。先ず、日本における『三国志演義』は、漢学者が扱い、次第に児童文学の領域でも扱われるよう

になる。

(一) 近代からの継続

二十世紀に入ると『通俗三國志』に評釈をつけたものや読みやすく書き改めたものが出始める。

幸田成行校訂『通俗三國志』は、本文の前に幸田露伴が解題を書き、『絵本通俗三國志』を底本として活版印刷したものである。^(一)一九二七年に日本文藝叢書刊行會から再刊されている。

一九一一年の伊藤銀月『三國志物語』は、目次は独自のものだが、本文は『通俗三國志』の文章に手を入れダイジェストにしたものである。成光館から一九一四年に四版として、本文が同じものが出版されている。

『通俗三國志』以外の『三國志演義』関連書籍は、漢文に評釈をつけるスタイルのものが早く出た。東海義塾の『支那小説譯解』には、『遊仙窟』『水滸傳』『照世盃』『西湘記』『杜鰲新書』『李娃傳』などと共に、井上碩田による『三國志演義』の解説が収められている。『支那小説譯解』は逐次刊行されており、一九〇〇年発行の第十一號に、毛宗崗本の第一、二回の原文と解説が掲載されている。^(二)

一九〇六年に発行された久保天隨『三國志演義』も評釈書で、名場面を取り上げ、書き下した上で文語訳と解説を附している。底本は毛宗崗本で、取り上げられている場面は、「王允連環の計」「曹操酒を煮て英雄を論ず」「關羽五關六將を斬る」「草廬三顧」「赤壁曹操の敗」「劉玄德吳より歸る」「先主猊亭の敗」「孟獲の七擒」「街亭の戦」「五丈原諸葛の薨去」である。^(三)

(二) 翻訳書

『通俗三國志』や『三國志演義』の評釈、抄訳に止まらない翻訳の嚆矢は、一九一二年の久保天隨『新譯／演義三國志』である。底本は毛宗崗本で、文語文で書かれている。久保は、『通俗三國志』の長所も取ったとし、『三國志演義』和訳の成本としたいと抱負を述べている。^(四)下巻には、附録「諸葛亮にして死せざりせば」を掲載している。これは、清の夏綸の戯曲「南陽樂」の構想を紹介するもので、夏綸の書きぶりとは『三國志演義』との違いを概説した上で、内容の梗概を記している。本書は、吉川英治が幼い頃に読んだものだと思われるが、再刊などの詳細は不明である。^(五)

その後の翻訳の登場は、戦後を待たねばならない。^(六)

(三) 子ども向けの再話

明治以降、各種の自伝類によれば、少年たちも大人と同じテキストで『通俗三國志』を読んでいたが、日本では一八九〇年代に始まった児童文学の題材としても、次第に『三國志演義』が取り上げられるようになる。『通俗三國志』の文章をなぞらない子ども向けの再話に、一九二六年の最上哲夫『三國志物語』と一九四〇年の野村愛正『三國志物語』がある。

最上『三國志物語』は、金蘭社から発行された児童読物のシリーズ「世界名篇物語叢書」に収められており、子ども向けに再話されている。^(七)一九三一年に『少年三國志』と改題され「金蘭社名著文庫」の一冊として再刊行された。一九三一年版は、一九二六年版の巻頭イラストがカラーで表紙になっているなどデザインの変更はあるが、本文は完全に同じである。

野村版は、大日本雄辯會講談社から一九四〇年に発行された。外函

や表題、広告などには明記されていないが、出版された時期や装丁などから一九三七年に刊行が始まった「世界名作物語」に収められていたと考えられる。

底本について言及はないが、文章が類似している箇所があるため、『通俗三國志』を底本としている可能性が高い。また、野村版では、周瑜の依頼で諸葛亮が集めた矢の数を「(…)二十隻で九萬にあまつた。」とする。ここで、矢の数を「十萬」ではなく「九萬に」余るとするのは、周曰校本、余象斗本、葉逢春本、一部の『通俗三國志』、雄山閣版であるが、雄山閣版と野村版は、互いにそれぞれだけでは底本になりえない。

野村版は、戦後も何度か再刊された。戦中、児童文学は、一九三八年の「児童読物改善に関する指導要綱」に代表される統制と保護を機に発行部数を伸ばしたが、体制側の締め付けが厳しくなるに従って表現の範囲が狭められ衰微した。戦後は、人々の読書欲に伴う出版好況が児童文学にも訪れたが、そのブームは一九五〇年代には収まったとされる。野村版の出版状況はこの流れに合致しており、一九四〇年に豪華な装丁で出された後、戦後は粗悪な紙で度々再刊された。一九四〇年版、一九四六年版、一九四九年版は、ほぼ同じ文章で、一九五二年版で、目次、本文ともに大きな書き換えがなされた。

三、日中戦争期の「三國志」ブーム

日中戦争期には、これまで述べたような『通俗三國志』や『三國志演義』の注釈、抄訳、翻訳、子ども向けの再話のいずれにも当てはまらない、大人向けの再話が登場する。岡本成蹊『新譯三國志』、吉川

英治『三國志』、村上知行『三國志物語』、雄山閣編『三國志』、弓館芳夫『三國志』である。『三國志演義』や『通俗三國志』を底本にしても、文章は底本をなぞるのではなく、新たに語り直されている。また『三國志』を基にして構成された大場彌平『秋風五丈原』も出版されている。

先行研究は、吉川版には内容まで踏み込んだ詳細なものがあり、村上版、弓館版は、吉川版と共に桑原氏が言及している。大場『秋風五丈原』は、弓館版と共に中林が名を掲げるのみで、岡本版、雄山閣版についての先行研究はない。

以下、発行年代順に概説する。

(一) 岡本成蹊『新譯三國志』

岡本版は、八紘社から一九三九年七月に発行された。閲覧できた本は「八紘社大陸版」と銘打たれた一九四一年の十版であり、好評だったためか版を重ねたことが分かる。一九四九年には、杉山書店から同タイトルのものが岡本成二名義で再刊されており、本文は殆ど同じだが、一九三九年版で時局性を帯びていた部分は削られている。

岡本は、バイロンの翻訳で知られる英文学者だが、その著作には、英米文学の翻訳や研究書以外にも随筆集やアメリカの実業家の伝記などがある。「主要著作目録」では、一九四三年に『新釈漢楚軍談』を出版したとするが、詳細は不明である。

岡本は漢学の盛んな家に育ったと言え、長じてからも、英詩に加え、漢詩や日本近代詩、日本画を愛でたという。毛宗崗本にしかない「孫夫人投江而死」があることと併せて考えると、毛宗崗本もしくは久保訳が底本になるだろう。

本書は、靈帝の御代の天変地異から諸葛亮の最期までを一冊のうち

に描いており、諸葛亮の死後も晋の成立まで概説している。

岡本版の特性は、比較的平易な言葉遣いに加え、文章の自由度が高いこと、語り手の価値観が盛り込まれていることである。

平易な言葉遣いは登場人物の発話や内省に顕著で、主に武将の言葉として表れるため大きな違和感はないが、連環の計に際し呂布が「へへ」と卑しい笑ひを浮べる。^(二五)「ような描写は通俗的に過ぎると感じられることもあるだろう。」

また、登場人物の行動が他の再話と比べると軽く感じられるが、簡略化のため描写が少なくなり、避け難い部分ではある。不利に働く場面もあるが、呂布が丁原を斬り董卓に寝返る場面では、詳しい行動の描写がなく、地の文で淡々と語られることで、呂布があつさりと裏切ったという印象を強めている。^(二六)

簡略化が激しいためか、『三国志演義』から自由で文章の独自性が強くなっており、時折ユーモアも垣間見える。^(二七)

文章の自由度を受け、語り手の価値観も随所に盛り込まれており、何進が董卓を招く場面には、次のような警句的な文章が挟まれる。

全く将来の見透しがつかなかつたり、人間を見る明のない人間程勇敢なものはない。だが同時にこれ位恐ろしいものもない。そのためにどれだけの大事が惹起することになるか――

そして、董卓を招いたことを「あゝ思慮なき者の悲劇である」と嘆いた後、為政者の心得について語っている。

一国の興隆も衰亡も、實に爲政者の一舉手一投足に始ることが多い。

これを思へば爲政者たる者、充分心しなければなるまい。私利私慾を離れ、遠大なる理想の下に、而も鋭敏なる叡智に輝く洞察^(二八)力を以つて、國家を推進せしめることこそその任務であらう。

また、諸葛亮の姿勢に対し、為政者の守るべき金言との評価を与えており、^(二九)為政者のあり方に関心を寄せていることが分かる。以上のように長く自らの理念を訴える場面もあるが、短い感想を挟むこともある。連環の計の場面で「戀は曲者といふのは、眞實昔も今も變りがないのだらう。」と語ったり、関羽が曹操の元を辞す際「……關羽の如き崇高^(三〇)い人物の存在することは、確かに一服の清涼剤であらう。」と感慨を漏らしたりしている。^(三一)

岡本版では大幅な簡略化が行われており、『三国志演義』に沿って物語を進めることが出来なかった。その結果、他の再話に比べ文章の独自性が強くなり、語り手の価値観や感慨が本文に色濃く映じている。

(二) 吉川英治『三國志』

吉川版は、『中外商業新報』では一九三九年八月二六日に連載が開始され、その他にも『名古屋新聞』『小樽新聞』『台湾日々新報』『京城新報』に掲載された。挿絵は、『宮本武蔵』の前半同様、矢野橋村が担当し、常に本文と共に掲載された。^(三二)

吉川研究において『三國志』は『宮本武蔵』に続く吉川の長編小説ではあるが、原作を持ち後半は内容の独創度が低いとされ、^(三七)全体的な位置付けはあまりなされていない。^(三八)一方、日本の『三国志演義』受容研究においては、戦後のブームの基礎を成す作品であるため重要視されている。^(三九)

先行研究では、底本は博文館編輯局校訂『通俗三國志』(博文館、

一八九三年」とされるが、吉川の蔵書には、その他にも『三国志演義』関連書籍があった。吉川版執筆時に吉川の手元にあった可能性の高い「三国志」関連書籍は以下の通りである。いずれも吉川英治記念館所蔵の吉川英治の旧蔵書である。

月の舎秋里編述『通俗絵本三國志』^(四〇)

永井徳鄰『通俗演義三國志』(須原屋茂兵衛等、一八七七年)

博文館編輯局校訂『校訂通俗三國志』上下(博文館、一八九三年)

西脇玉峯『諸葛孔明言行録』(偉人研究 第二九編、内外出版協會、一九〇八年)

三浦理編『通俗三國志』上中下(有朋堂書店、一九一二年)

村上知行『三國志物語』第一巻〜第三巻(中央公論社、一九三九〜一九四〇年)

『校訂通俗三國志』は編ごとに綴じ直されており、吉川版の連載回数や章題、傍線が書き込まれている。『通俗三國志』の上巻にも傍線が書き込まれているが回数は書かれておらず、中下巻には書き込みは見られない。村上版の第一巻には、序に傍線が引かれている他、一部に回の区切りを示す記号と吉川版の回数が附されているが、二、三巻には書き込みは見当たらない。『通俗絵本三國志』にも人物名を中心に多くの書き込みが見られるが、吉川の筆跡ではないようなので、前の持ち主によるものと考えられ、『通俗演義三國志』と『諸葛孔明言行録』には、書き込みは見られなかった。吉川版は久保訳を挿入しているとされるが、実際に吉川が本文中に引いたものは不明であり、これら以外の参考図書が存在する可能性や、吉川が忠実に引いていない可能性もある^(四四)。

吉川版の冒頭、桃園結義に至るまでの三兄弟の出会い、吉川のオリジナルであり、最後に、諸葛亮の死で筆をおいた理由については、作者読者ともに諸葛亮の死後は、三國志への興味が失われるからだとし、「篇外余録」という節で諸葛亮の死後、晋の統一までを概観している。

主な特徴は、先行研究に詳しく、現代の作家の眼から不必要な怪奇性を除いた合理化や、吉川が曹操に対し同情的態度に立ち、人間的な魅力を描く中で独自の曹操像に到達し、三國志の世界が勧善懲悪から立場の違う好漢たちの闘争のドラマになったことなどが評価されている^(四五)。

他の再話に比べると、吉川版の言葉遣いは非常に丁寧なものとなっており、同じく大衆向けで、気軽に読めるようにという配慮からか俗語を多用する岡本版、弓館版とは対照を成す。吉川版は平易な語り口ながら、決して卑俗に堕さない叙述を保つため、読者を尊重しつつも教示的、啓蒙的な筆致で書かれていることが感じられよう。

(三) 村上知行『三國志物語』

村上版は全三巻で、一九三九年十一月から翌年二月にかけて中央公論社から出版された。村上は一九三九年四月十九日の時点で著述に八か月以上掛かったとしているが、同年七月の岡本版や、八月に連載が始まった吉川版を意識したものかどうかは分からない。

村上は、当時北京に住んでおり、中国通として著作活動を行っていた。村上が中国に渡ったのは一九二七年だが、文筆活動が活発になるのは満洲事変が始まってからである。一九三五年の単行本『九・一八前後』からは、日本国内の関心が、九・一八事件の最中に北京にいた村上に対する需要を生み、執筆活動を促したことが窺える。村上は

一九三五年から『中央公論』に寄稿しており、一九三八年には同社から『支那及び支那人』を出しているため、村上版もその縁で出版されたものだろう。^(四九)

村上版の底本は毛宗崗本で、大筋は原文に沿うが逐語訳ではなく、作者による補足や省略なども随所に見られる。村上版は、霊帝の御代の天変地異から晋の統一までを描き、附録として、第二巻には「姓氏要覽」と「三國志物語要圖」が、第三巻には「三國志物語略年表」と「三國志物語要圖地名索引」が附けられている。

中国の故事や当時の語彙などを用いた解説や、「スパイ」や「クーデター」など現代的な語彙を使う場面が見られる。「〔…〕」や「長安を留守にしてゐる隙に〔…〕」「田舎ツペの孔明〔…〕」といった口語的な表現なども指摘できる。

そして、分かりやすさを追う例として、関羽が于禁の陣の配置を聞く場面が挙げられる。『通俗三國志』、吉川版が同じエピソードを語りつつも意味を明確にせずにいる部分^(五〇)をきちんと説明し、中国に身を置いていた村上の面目躍如といった感がある。

關羽の此の答の意味はかうである——乃ち于禁の于の字は、中華の音で『魚』の字に通ずるし、また、『聲』とは四手網のこと。つまり『魚が四手網に入つたから——』といふのだ。^(五〇)

また、一卷に集中しているが、章回小説のように話への興味を高めようとしているのか、会話の途中など続きが気になる形で章題を挟んでいる。村上版の章題は『三国志演義』より細かく、三巻で三四四項目ある。

『然らば汝は死んでも構はぬ氣か？』

百二、征西の師

王修は從容として、答へた。^(五一)

章回小説的な性格を訳文にも表そうとした試行錯誤の跡と見ることもできるのではない。

村上版は、附録の存在にも顕著だが、分かりやすさに留意しており、当時の読者が興味を持つて読み進められるように配慮しているが、一方で、他の再話に比べると、より原文に近いものを提供しようという意図も垣間見える。

(四) 雄山閣編『三國志』

雄山閣版は「物語近世文學」の第十五巻として一九四〇年八月に発行された。中国の歴史を語った後、霊帝の御代の天変地異から物語を始め、諸葛亮の最期と魏延の謀反までを描いており、諸葛亮の死後も晋の成立まで概説を附す。巻頭に笹川臨風の解説が掲げられている。^(五二)

雄山閣版の著作権者兼発行者には、社長である長坂金雄の名が記されているが、本文の作成は雄山閣の関係者が行った。「物語近世文學」を担当していたのは、社外の嘱託編集員だった足立勇で、足立は一九三四年からの「玩具叢書」や一九三七年からの「物語東洋史」など雄山閣編とされているものの大半を担当したと、旧社員の回想にある。旧社員、湊元によれば、足立は一九三一年からの『異説日本史』で主筆を務め、湊元の友人たちに仕事を回して執筆していたそうだが、「物語近世文學」でも同様の手法を取った可能性はある。^(五三)

雄山閣版の底本は不明で、『通俗三國志』の現代語訳のような部分や、同じく『通俗三國志』に特徴的な胡蘆谷で諸葛亮が魏延を焼き殺

そうとするエピソードがある一方、毛宗崗本の特徴も見られないが、五関に六将を斬る場面では、毛宗崗本に基づく村上版に表現が似通っている。このような底本の錯綜状況を見ると、複数の本を参考にしながら書き進めたとも考えられるが、当時の雄山閣の編集手法を併せて考えれば、複数の作者が違う本に基づきそれぞれの担当箇所を書いた可能性が高い。詳しい検討は今後の課題である。

雄山閣版の本文は『通俗三國志』の口語訳のような部分や、簡略化が進みあらずじようになっている部分も見られるが、章ごとに「群雄の出現」「曹操」「劉備」「赤壁の戦」「蜀の國」「關羽」「孔明」「五丈原」とタイトルがつけられた目次からは、主要人物や歴史の流れを軸に物語を捉えようとしていることが窺える。これは、同時代の他の再話には見られないものであり、雄山閣版の特色と言える。

本文中には誤りではないかと思われる箇所や典拠の分からない部分が見え、例えば、徐庶の字が天直とされていたり、龐統の名前が廓統になっていたりする。

(五) 弓館芳夫『三國志』

弓館版は、第一書房「戦時體制版」の一冊として一九四一年一月に発行された。弓館は新聞記者で、一九〇五年萬朝報に入社、一九一八年には東京日日新聞に移り、一九三七年新聞社を引退した。弓館は「戦時體制版」の中で『西遊記』『水滸傳』『三國志』と、代表的な中国古典小説の再話を担当した。「戦時體制版」の『西遊記』『水滸傳』は初版二万部、『三國志』は初版三万部である。

弓館版の底本は特定できないものの、『通俗三國志』と一致する部分があるため、『通俗三國志』を参照したことは確かで、底本である可能性も高い。

桃園結義から諸葛亮の最期と魏延の謀反までを描いており、諸葛亮の死で話を終えることについては、「千両役者の孔明丈が居なくなつては、讀者諸君にも、大して興味がなからうかと思ひまして……」と吉川同様の理由を述べている。

弓館版の特徴は、流行言葉や時局語、俗語を大量に導入し、読みやすさ、分かりやすさに徹していることである。弓館自身、前書きで読みやすさを自負しており、本文からも分かりやすさが追求されていることが窺える。例として、赤壁の戦いの際の黄蓋について「例の降参詐欺の」と言葉を補ったり、蜀将馬忠について「關羽を捕へた馬忠とは、無論同名異人」という注をつけたりといった工夫が挙げられる。

また、読みやすくするためか滑稽な表現も多く、曹洪に対する敵軍の罵り言葉が「モシモシ曹洪、曹洪さん、世界の中でお前ほど、臆病未練な者はない……」と『うさぎとかめ』の「もしもしかめよ」で始まるメロディをなぞっている箇所は顕著な例である。駄洒落も用いられており、長坂坡で趙雲が曹操軍の中から阿斗を救い出す場面では、「〔…〕夏侯恩といふ奴。〔…〕青釭」という名剣を授かつて、威張り腐つて居る男でしたが、命とともにその劍まで取られてしまったのは、之はどうも「成功」とは申されない。」など、固有名詞と事柄を合わせて掛けている。

俗語や口語も盛んに盛り込まれており、文中の戲画的な色彩を増している。当時の俗語や口語表現の例として「越中禪」「チャンと承知之助」「お三時に一休みして」などがある。

登場人物の発話も口語的で、講談や落語のような表現になっている。岡本版など同様の傾向を持つものも、弓館版に比べれば標準的な言葉遣いで発話を行うことから、弓館版の個性は際立っていると言える。許褚の「ようがす、馬力をかけて一ト働き致しやせう。」や張飛の「へ

ン、どんなもんでえ……」など、武将の言葉なら比較的違和感も少ない。^(七三)しかし、諸葛亮の「ウワツハハハ、こんな子供だまして、人を誑かさうとは、周瑜といふ奴は、呆れ返つた愚か者だ。今度こそは彼奴も、いよいよお陀佛だらう。」、続く周瑜の「孔明の古狸奴、たうとう俺の計略にかかつたわい。今度こそグウとも云へぬ目を見せてやれるぞ。」などの表現は、他の再話が両者の知的側面を強調しているのは対照的で、智略を尽くした謀略戦を行う軍師と知将の言葉遣いとは受け取りにくくなっているのではないか。

カタカナの多用も弓館版の特徴である。「〔…〕」戟の柄にブツリ、紀霊は呆氣に取られてただ目をパチクリー」「〔…〕」ベロベロデレデレでテンデ手が付けられない。」など、擬態語・擬音語が多用されている。ルビの振り方にも特色が見られる。「好案内者」と書いて「かうガイド」、「終止符」に「ピリオド」とルビがふられ、多彩な表現を取っている。これらのカタカナやルビは、創作時に弓館が視覚的・音声的な読みやすさや楽しさを求めていることを推察させる。

語り手の感想も頻繁に挟まれる。^(七四)顔良と文醜について「〔…〕」名前こそいい男と悪い男みたいだが「〔…〕」と言ったり、諸葛亮について「秀才型の彼ですから、大方肺病の気があつたのでせう。」と言ったりしており、これらの語り手の感想や思いつきは、読者の感覚と重なる部分も多く、弓館版を身近に感じさせる効果があるだろう。吉川版のように附言をつけるのではなく、読者の感想を後押しするような語り手の介入がさり気無く挟まれることで、読者は膝を打ち、語り手との一体感すら覚える場合もあるかもしれない。司馬徽が伏龍、鳳雛の具体名を伏せる場面では、「居らんで幸ひ、若し張飛がここに居たら、無論これは拳骨ものでせう——」^(七五)と想像を膨らませることで、読者を楽しませようとしているようだ。「馬騰といふのは、讀者諸君もまだ

御記憶でせう。」「〔…〕」古往今來、戒むべきは婦女子に心を許す事ですぞ。」などの例からは、^(七六)読者を意識した語り手の姿がはっきりと表れており、本文全体が敬体になっていることから、読者に物語を語ろうという意識が窺われる。

このような弓館版に見られる多くの工夫は、読者を強く意識し人を楽しませようという書き手の態度によるものと考えられ、他の著作・隨筆にも通じる弓館の独自性と言えよう。弓館版は、徹底して平易に、娛樂的に作られており、読む際の心理的負担は相対的に低くなっている。

(六)『三国志』の再話

以上のように、一九三八年から一九四一年の間に、様々な『三国志演義』の再話が刊行されており、それぞれに性格や表現手法が異なっていた。

更に、同じような大人向けの再話として、史書に基づいた読み物も刊行された。中央公論社から一九三九年六月に出版された大場彌平の『秋風五丈原』である。前半は「漢楚軍談」で、後半の「秋風五丈原」と抱き合わせにされている。「秋風五丈原」は、後漢末の混乱から諸葛亮の死までを扱う歴史物語で、諸葛亮の評伝ではない。内容から底本は『三国志演義』ではなく史書だと考えられる。^(七七)

同様に、田中久『兵法三國志』も史書を基にし、時系列に沿って再構成した戦史研究書である。後漢の衰退から赤壁の戦いまでを扱う。^(七八)

四、おわりに

『三国志演義』関連小説として、明治期は一般的に『通俗三國志』が老若問わず読まれていたが、二十世紀に入り多様化の一途を辿った。初めは『通俗三國志』に基づいたものや『三国志演義』の評釈書が中心だが、毛宗崗本の翻訳や子ども向けの再話といった『通俗三國志』にない部分をカバーする著作が出現する。そして日中戦争が始まると、様々な書き手によって大人向けに多数の再話が見られるようになる。

評釈、翻訳及び子ども向けの再話は、漢学者と児童文学の書き手によるものだった。これらの著述は彼らの仕事の範疇にあり、『三国志演義』は漢学と児童文学の領域で扱われていた。一方、日中戦争期に大人向けの再話を担った人々は、英語教師、大衆小説家、中国通、編集者、新聞記者と多様で、書き手の個性が意識された上で『三国志演義』の再話が広く出版されたことを示している。また、『三国志演義』の再話にとどまらず、史書を語り直したのも出版されていることから、日中戦争期における「三国志」熱の高まりが窺える。

日中戦争期に「三国志」が注目されたのは、日中戦争を受けてのことだと推測される。日中戦争の性格から、アジアの同胞である中国への関心が日本国内で高まり、出版がそれに応えようとする状況下で、『三国志演義』は、読みやすい大衆文芸として日本でも長く受容されてきたため読者の興味が見込めること、戦史であり実際の戦況と地名が重なっており、人物像も重ねられることなどから、多数の再話が出版されたと考えられる。^(三)

本稿で示したように、日中戦争期には多様な『三国志演義』の再話が登場した。戦後、吉川版や岡本版、野村版は再刊され、吉川版を中心に多くの読者を獲得した。読者は「三国志」に触れる際に『通俗三國志』以外の再話も簡単に選択できるようになったのである。日中戦争期に出版された『三国志演義』の再話が、戦後の『三国志演義』受

容の基礎を成したと言えよう。

戦後の『三国志演義』の再話の展開については、今後の課題としてい。

《注》

(一) 本稿では、『三国志演義』全般を指し『三国志演義』と表記する。版本の違いは必要に応じ附言し、各版本の呼称及び引用は、周文業氏「中国古代小説デジタルプログラム」に拠る。『三国志演義』や史書『三国志』を含み、広く三国時代に纏わる言説を指す場合は「三国志」と表記する。また、原文と対照できるものを翻訳、その他の省略や意識を含むものを再話と呼ぶ。

(二) 後掲注(七)参照。『中外商業新報』の合併により、タイトルが変わっているが、単行本では『三國志』という題名でまとめられているため、本稿もそれに倣う。以下、吉川版とする。

(三) 「三国志」とはこんなに面白いものか、とおわかりになったら、あらためて「吉川三國志」をお読みになるといい(柴田鍊三郎『三國志』(世界の国民文学①、鱗書房、一九五五年、二四七頁)。

(四) 一九八〇年代には、「三国志」についてインタビューを受けた六人中五人が、吉川版を読んだという(部課長にきく、わが「三国志」体験」(『三二』六月特別号、一九八五年六月)、五六～五九頁)。戦後に『三国志演義』の再話を行った作家たちも、吉川版を意識している。陳舜臣『諸葛孔明』で吉川三國志の宿題を提出「[吉川英治記念館編『吉川英治歴史小説の世界―壮大なるロマンの魅力』(吉川英治記念館、一九九二年)、六五頁]、北方謙三『三国志の英傑たち』(角川春樹事務所、二〇〇六年)、十三、十六頁など。

(五) 『通俗三國志』は、博文館編輯局編『通俗三國志』第一～六卷(博文館文庫一五三～一五八、博文館、一九四〇年)に拠り、引用も同書から行

った。必要に応じ他のものも参照した。

- (六) 石崎又造「近世俗語文學書目年表」『支那俗語文學史』(弘文堂書房、一九四〇年、再版、一九四三年)、四一四〜四四三頁、雑喉潤『三國志と日本人』(講談社、二〇〇二年)、中林史朗「日本人に於ける三國志とは―見るのか、讀むのか、江戸から現代まで」(『大東文化大学漢学会誌』四八号、二〇〇九年)、二三七〜二七四頁、上田望「日本における『三國演義』の受容(前篇)―翻訳と挿図を中心に―」(『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』九卷、二〇〇六年)、一〜四三頁。

(七) 出版年順の書誌情報は以下の通り。

- 1 井上新一郎編『支那小説譯解』第十一號(東海義塾、一九〇〇年三月五日) 二一 cm 和装
- 2 久保天隨『三國志演義』(支那文學評釈叢書 第一卷、隆文館、一九〇六年) 二三 cm
- 3a 幸田成行校訂『通俗三國志』全八卷(日本文藝叢書、東亞堂、一九一一年) 一六 cm
- 3b 幸田露伴校訂『通俗三國志』全八卷(日本文藝叢書、日本文藝叢書刊行會、一九二七年) 一六 cm
- 4a 伊藤銀月『三國志物語』(日高有倫堂、一九一一年) 二二 cm
- 4b 伊藤銀月『三國志物語』(成光館、一九一四年) 二二 cm
- 5 久保天隨『新譯／演義三國志』上下(新譯漢文叢書 第十二〜十三編、至誠堂、一九一二年) 一六 cm 久保訳とする。
- 6a 最上哲夫『三國志物語』(世界名篇物語叢書六、金蘭社、一九二六年) 二〇 cm
- 6b 最上哲夫『少年三國志』(世界名著文庫、金蘭社、一九三一年) 二〇 cm
- 7 岡本成蹊『新譯三國志』(八紘社、一九三九年) 一九 cm 岡本版とする。
- 8 吉川英治『三國志』(『中外商業新報』一九三九年八月二六日夕刊) 一

九四二年十月三十日夕刊」、吉川英治『新編三國志』(『日本産業經濟新聞』一九四二年十一月三日夕刊) 一九四三年九月五日夕刊」

- 9 村上知行『三國志物語』第一卷〜第三卷(中央公論社、一九三九年十一月、十二月、一九四〇年二月) 二〇 cm 村上版とする。

- 10 野村愛正『三國志物語』(大日本雄辯會講談社、一九四〇年、四版、一九四一年) 十九 cm 野村版とする。

- 11 長坂金雄『三國志』(物語近世文學 第十五卷、雄山閣、一九四〇年) 二三 cm 雄山閣版とする。

- 12 弓館芳夫『三國志』(第一書房、一九四一年) 十九 cm 弓館版とする。

(八) 成行は、露伴の本名。長尾直茂「通俗物研究史略―附『通俗三國志』解題―」(『漢文學解釋與研究』一号、一九九八年)、四八頁。解題の内容は、中川論「幸田露伴と中国古典小説」(『季刊日本思想史』五七号、二〇〇〇年)、四四〜五十頁に詳しい。

(九) 今回確認できたものは、第一號(一八九八年三月二十日)及び第十一號(一九〇〇年三月五日)である。第十一號の時点で発行に遅れが生じていたようだが(同奥附)、以降の発行状況など、詳細は不明である。『支那小説譯解』及び井上碩田については、高島俊男『水滸伝と日本人』(大修館書店、一九九一年)、二五五〜二五六頁で解説されている。

(一〇) 「座談会」『三國志演義』研究をめぐって(井上泰山・上田望・金文京・小松謙・中川論・竹内真彦)『未名』二四号、二〇〇六年)では、一九〇六年の久保天隨訳が本邦初の毛宗崗本の翻訳であり、明治初の『三國志演義』の翻訳だと述べられている。

(一一) 同じ「新譯漢文叢書」に収められた久保天隨『新譯／水滸傳』は、江戸旧訳を写す中で旧訳が飛ばしたところを補ったとされるが(高島注(九)書三〇四頁)、『演義三國志』では、『通俗三國志』と底本も異なり、引き写しではない。

(一二) 幼い吉川が寝ずに読んだ原書ということから、注釈書ではなく、この翻

訳版だと思われる（吉川英治『三國志』巻の一（大日本雄辯會講談社、一九四〇年）、四頁）。

- (三) 久保訳の翌年から『資治通鑑』魏紀の和訳も出ている。黄巾の乱から後漢滅亡までを扱う笹川種郎校『英雄経』（敬文館、一九一三年）及び、続く黄初元年から咸熙元年までを扱う笹川種郎校『三國時代と諸葛孔明』（敬文館、一九一四年）である。訳者は秋野淡香で、文語文で書かれ頭注が附いている。

- (四) 「物語の圧倒的な迫力を前にして、児童書、一般書の区別は、あまり意味をもたなかったようだ（児童文学翻訳大事典編集委員会編『図説 児童文学翻訳大事典』（大空社、二〇〇七年）、二六七頁）」とも言われており、野村版や、桑原武夫『新唐詩選続篇』（岩波書店、一九五四年）、吉川幸次郎『三國志實録』（筑摩書房、一九六二年）などにも、幼い頃に『通俗三國志』を読んでいたと書かれている。

- (五) 「世界名篇物語叢書」は少年少女向けだと明記されており、児童書であることは明白である。

- (六) 講談社の児童文学シリーズについては、佐藤宗子「解説」「尾崎秀樹・小田切進・紀田順一郎監修、佐藤宗子編『少年翻訳小説集』（少年小説体系第二六巻、三一書房、一九九五年）」、五一五～五一七頁に詳しい。

- (七) 例えば、野村版一三六頁、注（五）所掲書三・六一頁。

- (八) 野村版一六六頁。

- (九) 九万本とするのは、共同出版株式會社校訂『校刻／通俗三國志』（共同出版株式會社、一九〇九年）、早稲田大學出版部編『通俗二十一史』第四巻（早稲田大學出版部、一九一一年）、三浦理編『通俗三國志』中（有朋堂書店、一九一二年）など。一方、博文館編輯局校訂『校訂通俗三國志』上（帝國文庫第十一編、博文館、一九九三年、十四版、一九一〇年）や、注（七）所掲書3b三巻などは十万本となっている。

共同出版株式會社の翻刻本については、高島注（九）書二四四～二四六頁に、訓点本については、同二五八～二五九頁に解説がある。

- (一〇) 例えば、雄山閣版には、野村版が描く関索が登場せず、逆に、野村版は、雄山閣版が描く、関羽を華陀が治療する場面での華陀の名乗りがない（野村版二三八、二七四頁。雄山閣版一八三、二〇一頁）。

- (一一) 鳥越信「戦時下の児童文学」『国文学解釈と鑑賞』四八巻十一号、一九八三年、一七二～一七五頁。

- (一二) 野村版、野村愛正『三國志物語』（少國民名作文庫、大日本雄辯會講談社、一九四六年）、同『三國志物語』（世界名作文庫、大日本雄弁會講談社、一九四九年）、同『三國志物語』（世界名作全集、大日本雄弁會講談社、一九五二年）。

- 谷沢永一「解説——乱世を駆け抜けた勇者たち」「野村愛正『三國志物語』男は、こう生きよう死んだ」（クレスト社、一九九三年）では、一九四六年版で書き換えがなされたとする（同四～五頁）。雑喉注（六）書も同様の見解を示す（同二〇五～二〇六頁）。

- (一三) 大場彌平『秋風五丈原』（中央公論社、一九三九年）。大場彌平は、一八八三年、宮城県仙台市生まれの軍人、評論家。詳しくは、大場彌平「講者自傳」「公田連太郎・大場彌平『孫子の兵法』（兵法全集第一巻、中央公論社、一九三五年）、月報二頁」、大場彌平・上田修一郎『ナポレオン戦略』（甲陽書房、一九六六年）、五八六～五八八頁）など。

- (一四) 吉川版の先行研究は、本項（二）を参照。

- 桑原武夫「三國志のために——吉川幸次郎君に——」『文藝』一九四二年八月、四頁。『桑原武夫全集』第三巻（朝日新聞社、一九六八年）所収」では、村上版の洗練化、弓館版の簡略化、吉川版の独自化を指摘し、更に、共通する傾向を現代化常識化とまとめた上で、長さや反復、定型の繰り返しという『通俗三國志』の長所が失われているとして、村上版、弓館版、吉川版を批判する。

- 中林注（六）論文二五〇～二五一頁。

- (一五) 岡本成二『新譯三國志』（杉山書店、一九四九年）。岡本成二については不明だが、成蹊や岡本版の表紙に書かれた京三と名が似通っており、本

文も殆ど同じなので、同一人物と考えて差し支えないだろう。

- (三) 岡本成蹊教授傘寿記念論文編集委員会『英米文学語学論叢——岡本成蹊教授傘寿記念論文集——』(桐原書店、一九八四年、三三二頁)、『新譯三國志』も同目録では『新釈三國志』となっていることから、『新譯漢楚軍談』であった可能性も高いが、確認できなかった。

- (七) 同上書Ⅳ頁、森納『続、因伯の医師たち』(綜合印刷出版株式会社、一九八五年)、一四四～一四五頁。

- (八) 岡本版三八六頁。中川論『三國志演義』版本の研究』(汲古書院、一九八八年)。

- (九) 岡本版八九頁。

- (一〇) 赤壁の戦いの前哨戦で、『三國志演義』で描かれる諸葛亮の活躍が殆ど削られているため、周瑜は東南の風を起こした一点だけで、同盟相手の軍師である諸葛亮の殺害を計画する。『三國志演義』では、諸葛亮の智謀が何度か示されるので周瑜の行動も理解されやすいが、岡本版では些か唐突な印象を与えかねない(同上書二四四～二五一頁)。

- (一一) 同上書五五頁。

- (一二) 安喜県の役所を督郵が占拠した場面で、張飛が番卒を退ける際「……ガツと張り飛ばした。全くその名前の通りである(同上書十九頁)」と書く。

- (一三) 同上書三九～四一頁。閲読した明治大学所蔵本では、「これを思へば」から「その任務であらう」までに赤線が引かれており、当時の読者も気に留めたのではないかと思われる。

- (一四) 同上書四二頁。

- (一五) 同上書一〇五、一七七頁。

- (一六) 吉川英治記念館編『吉川英治小説作品目録 改訂版』(財団法人吉川英治国民文化振興会、一九九二年)、二四、三三頁。

『中外商業新報』は一九四二年十一月に『経済時事新報』と合併し、『日本産業経済新聞』となり、一九三四年には、大阪と併せ十七万部発行さ

れていた。更に一九四三年六月に、四万部発行の『日刊工業新聞』と合併した(日本経済新聞社社史編纂室編『日本経済新聞八十年史』(日本経済新聞社、一九五六年)、四三二～四三三頁)。

- (一七) 城塚朋和『吉川英治「三國志」』(『大衆文学研究』一一三号、一九九七年三月)、十七頁。

- (一八) 松本氏は、吉川文学における『三國志』の重要性を指摘する(松本昭『吉川英治 その人生の歩みと作品の関連』(『本の本』一九七六年五月号)、十四～十八頁、同『三國志』茶話『吉川英治 吉川英治文庫八五三國志(八)』(講談社、一九七五年)、三六～三七五頁)。

- (一九) 雑喉注(六) 書及び、邱岭・吳芳齡『三國演義在日本』(宁夏人民出版社、二〇〇六年) など。

- (二〇) 吉川英治記念館編『吉川英治 人と文学』(講談社、二〇〇六年)、四十～四三頁など。

- (二一) 装丁は国立国会図書館所蔵の一八八五年、寛張栄三郎発行の和装本と同一だが、本文の版組は異なっている。綴じ直されているため、出版年、出版年は不明である。

- (二二) 残っているのは四編卷之一から卷之十、五編卷之四から卷之十、六編卷之一から卷之七である。

- (二三) 村上版に書き込まれた吉川版の回数が新聞に掲載された日は、村上版第一巻の発行より後であるため、吉川は執筆時に村上版を参照した可能性が高い。物語の後半部分の回数が書き込まれている『校訂通俗三國志』は、前半が残されていないため、村上版と並べて参照されたのかは不明である。村上版への書き込み箇所は資料一参照。村上の他の著作は所蔵されていない。

- (二四) 雑喉注(六) 書一四二頁。該当箇所は久保訳よりも『通俗三國志』に近いが、吉川の蔵書のいずれとも合致しない。

「その姿を『演義三國志』の原書はかう書いてゐる。——香象の海をわたりて、波を開けるがごとく、大軍わかれて、當る者となき中を、

／薙ぎ拂ひてぞ通りける（吉川版、一九四一年三月二十日夕刊。」

「香象の海をわたりて、波の開けるがごとく、両方へばつと散乱しければ直ちに顔良に出あひ只一刀に斬て落し（…）（月の舎秋里編述『通俗絵本三國志』七八ウ、吉川英治記念館所蔵）。」

「香象ノ海ヲ渡テ波ノ開ルガ如ク、兩旁ヘ分レテ通シタリ顔良コレヲ見テ彼ハ玄德ノ弟關羽ニ非ズヤト近付テ問ントスルニ關羽ハ既ニ馳來リ只一刀ニ斬テ落シ（…）（永井徳鄰『通俗演義三國志』（須原屋茂兵衛等、一八七七年）、二四ウ）。」

「香象の海をわたりて。波の開けるがごとく。兩方へばつと分れて。中をひらいて通しけり。顔良これを見て。玄德の弟。關羽にてはなきかと思ひちかくなりて問はんとしけるに。はや關羽が馬。つと馳來り。たゞ一刀にきつて落す（博文館編輯局校訂『校訂通俗三國志』上（博文館、一八九三年）、四五五頁）。」

「香象の海を渡りて波の開るが如く、兩旁へ颯と分れて中を開て通しけり。顔良これを見て、彼は玄徳の弟關羽にては無かと思ひ、近く成て問んとしけるに、早關羽が馬つと馳來り、只一刀に斬て落す（三浦理編『通俗三國志』上（有朋堂書店、一九二二年）、五〇三頁）。」

「（…）敵軍は波浪の二つに開くが如く、左右に裂かれた。その中間を、關羽はまつしぐらに走る。その鳳目は圓く睜られ、その意の如き眉は逆に立つてゐる。流石の顔良も恐れをなしたのであらう、我にもあらず、『誰だツ？』と叫ぼうとしたが、その矢先、早くも赤兎馬が彼を目かけて跳りかゝつた。同時に關羽の手に青龍偃月刀が閃いて、顔良はドツとばかり、血煙と共に倒れた（村上版一・三〇一〜三〇二頁）。」

「波開き浪裂くるが如く、その勢に恐れ、兩方へばつと分れ、中を開いて通しければ、關公、直に顔良に打つて蒐るに、顔良、この時、塵蓋の下に居て、關公の衝き來りしを見、誰ぞと問はむとする間もあらせず、關公の赤兎馬はやく面前に駆け來りしかば、顔良手を措くに及ばず、忽ち雲長の一刀に馬より下に衝き落され（…）（久保訳上、四五九頁）」

（四三） 吉川版、一九四三年八月二十日夕刊。

（四四） 前掲のものに加え、中田耕治「三國志」と二人の作家 吉川英治と柴田鍊三郎の作品を比べて（『週刊読書人』一九六六年三月三十一日）、尾崎秀樹「三國志を書いた理由は」（『図書新聞』一九六六年八月十三日）、木村一信「日本における諸葛孔明像（二）——明治以後」（『加地伸行「諸葛孔明の世界」（新人物往來社、一九八三年）』、立間祥介「三國志」三國志演義』と吉川「三國志」（一）〜（四）「吉川英治『三國志』（五）〜（八）（吉川英治歴史時代文庫三七〜四十、講談社、一九八九年）」、井波律子「日本人と諸葛亮」（『月刊しにか』一九九四年四月号）など。

合理化や人物像の刷新といった吉川版の特徴は、吉川版だけでなく、同時代の他の再話にも見られる。詳細は、拙稿「日中戦争期における『三國志演義』再話の特色」（『比較文学・文化論集』二九号、二〇一二年）参照。

（四五） 村上自身は、支那通、評論家、文藝家、ジャーナリスト、小説家、エッセイスト等と呼ばれても困ると述べているが（村上知行『大陸』（大阪屋書店、一九四〇年）、一〜三頁）、出版社及び読者は、村上を中国通と見做していただろう。

（四六） 村上知行『九・一八前後』（福田書房、一九三五年）。刊行の経緯は、奈良和夫・白井勝美・今井清一「日中戦争前夜北平の日本人ジャーナリスト——村上知行の小澤正元宛て書簡一九三五〜三六」（『近きに在りて』四一号、二〇〇二年）、十四頁に詳しい。

奈良和夫「村上知行覚え書（二）」（『日中芸術研究』三七号、二〇〇二年）には、中央公論社の木内高音宛の書簡が引かれており、村上知行『北京十年』（中央公論社、一九四二年）もある。

中央公論社は、日中戦争への作家の特派を続けるなど、時局への関心が高く、一九三九年には、六月に大場彌平『秋風五丈原』を出版、『中央公論』九月号には奥野信太郎「三國志演義を中心として」（奥野信太郎「三國志演義を中心として」（『中央公論』一九三九年九月特大號、一九三九

- 年、四五八〜四六五頁。「奥野信太郎『隨筆北京』(第一書房、一九四〇年)所収」を載せているため、同年十一月の村上版と併せ、読者の中国への関心を満たすため『三国志演義』を活用しようとしていたことが窺える(中央公論社『中央公論社七十年史』(中央公論社、一九五五年))。
- (四) 村上版三・十八頁。また、本文にも毛宗崗本に特徴的なエピソードが入っている。「關公秉燭達旦」(同上書一・二九五頁)、「曹操分香割席分坐」(同上書二・四二二頁)、「孫夫人投江而死」(同上書三・十六頁)。注(二八)参照。
- (五) 「筆者注」張角に書を受けた南華老仙について。「…」例の夢に栩々然として胡蝶となつた莊周のことであるが(「…」(同上書一・二頁。))、「(筆者注」諸葛亮の雲梯について)此の衝車といふのは、要所々々に鐵を使つた攻城用の戰車で、タンクの用をなすものだ(同上書三・一六四頁)。」
- (五) 同上書一・三〇八頁。
- (五) 同上書三・二七三頁。
- (五) 同上書一・八四頁。
- (五) 同上書二・一〇九頁。
- (五) 「晉口に入るもの、あによく走り出ることを得んや(注(五)所掲書四・二四九頁)」、「晉口に入るもの生きて能く出でず——といふ語が何かの兵書にあつたが、于禁は正にその死地へみづから入つたものだ。見よ、やがて彼の七陣が死相を呈してくるに違ひないから(吉川版、一九四二年十月九日)」
- (五) 村上版二・三七八頁。
- (五) 同上書一・三七六頁。他に『關公、ちよつとお止まり下さい。』／と叫びかけた者がある。／八十七、赤兎馬偷まれんとす／それは孫乾だつた(同三一八頁)。」など。
- (五) 雄山閣は「街の歴史家」といった人々に人気があり、同社もアカデミズムを大衆に理解してもらおうという姿勢を打ち出していた。笹川臨風は、三田村鳶魚と並び人気が高かった(大沢未知之助編『雄山閣八十年』(雄山閣出版、一九九七年)、一八〇〜一八一頁)。
- (五) 同上書一七七頁、「座談会」今昔あれこれ——旧社員大いに語る——(志水松太郎・湊元克巳・宇塚一郎・長坂一雄・芳賀章内)。「長坂金雄『雄山閣と共に』(雄山閣出版、一九七〇年)」、付録十八頁。
- (六) 例えば雄山閣版一八八頁、注(五)所掲書四・二八七〜二八八頁など。
- (六) このエピソードは、毛宗崗本及び村上版には見られない。竹内真彦「泣かずに魏延を焼き殺す——吉川英治の読んだ三国志」『アジア遊学』一〇五号、二〇〇七年)、十〜十八頁。
- (六) 雄山閣版五二頁、村上版一・三二七頁。
- (六) 「…」かゝる戰亂の間にいろ／＼話がある。「…」曹操は呂布を滅ぼさうと、いろ／＼策を施した(雄山閣版三十頁)。「これより祁山に出でて戰ふこと五度に及び(「…」その二三を物語らう(同二三二頁))。など。
- (四) 同上書一〜六頁。
- (五) 同上書八七、一五九頁。徐庶の字はその後用いられない。『三国志演義』では、字は元直とされる。龐統はその後鳳雛と呼ばれている。
- (六) 弓館芳夫『西遊記』(第一書房、一九三九年)、弓館芳夫『水滸傳』(第一書房、一九四〇年)。
- 『西遊記』は、一九二六年一月二六日から五月二七日まで東京日日新聞夕刊に連載され(毎日新聞一三〇年史料刊行委員会編『毎日』の三世紀——新聞が見つめた激流一三〇年』(別巻)(毎日新聞社、二〇〇二年)、三七八頁)、その後、改造社の求めにより加筆、完結させた上で、一九三二年二月に『世界大衆文學全集』の一つとして出版された(弓館小鰐『西遊記』(世界大衆文學全集六七卷、改造社、一九三二年))。『水滸傳』も『西遊記』同様新聞連載の再録だとされるが(高島注(九)書三五三頁)、毎日新聞の連載小説のリストには見えず、『水滸傳』と『三國志』双方が書き下ろしだという可能性もある。
- (六) 『通俗三國志』の独自部分が弓館版にも見られる。「曹操が一言の内、ついいは天下を奪はんと思ひあれば、千載の後までもこの言を聞いて、

曹操を疾まずといふものなし（注（五）所掲書一・五四～五五頁）。」「曹操がこの言動により後世の人に憎悪されるに至つたのは、蓋し當然の事と云はねばなりません（弓館版四三頁）。」

（六八）同上書三六四頁。

（六九）同上書一九〇、三二三頁。

（七〇）同上書二二八頁。

（七一）同上書一六四頁。

（七二）同上書八五、一七七、二五七頁。同三一頁では、「越樺」と省略されている。

（七三）同上書七五、一一九頁。

（七四）同上書二一八頁。

（七五）同上書九四、二〇八頁。

（七六）同上書二八二、三〇一頁。

（七七）弓館版では、作中で発話する主体を「譯者」とする（同上書三五〇頁）。

（七八）同上書一二六、三四三頁。

（七九）同上書一四四頁。

（八〇）同上書二二四、二二六頁。

（八一）赤壁の戦いで諸葛亮や龐統が活躍しないこと、華容道では孫権の兵が曹操を追ったことなどに顕著である（注（三）大場『秋風五丈原』一二一～一二八頁）。

（八二）田中久『兵法三國志』（新正堂、一九四二年）、一～四頁。『三国志演義』などから「俗説」も採り上げている。

（八三）注（四）所掲拙稿参照。